石狩の夏

〈作家・東京在住〉
梅田昌志郎

北海道の夏は短かい。じつに短かい。だからこそ鮮明で豪華なのだろう。夏の経験は独特な印象になって残る。

子どものころは石狩に行った。小学生の頃もっと早く幼稚園からだったと思う。毎夏一週間ほど。

小学校の時は「海浜学校」というのだった。たしか北海タイムス（昔の）が後援してできたのだったと思うが、それは最初だけだったのかもしれない。この当時の石狩町はもちろんさびれてはいたが、まだ鮭もずいぶんとれたし、町に人通りはあった。その人通りは石狩鍋や鮭鍋を観光用にするいまの人通りとはちがう。

幼稚園や小学校一年のころはポンポン蒸気が河口へ下ったと思う。茨戸から、札幌からバスが通うようになったのは、たしかその後のことである。もっと小さいころは〝馬鉄〟に乗って行ったような気もするが、これは不確かな記憶である。

海浜学校の宿舎は、女の子が町の入りぎわに近い所にある寺―その名前をどうしても想い出せない―で、男の子の方は、その門前にあった。かつての鮭番屋、この鮭番屋はたしか私の親せきが昔網元をしていた時のものだったはずである。

石狩の海は波が高い。けれど砂浜がじつにきれいだった。砂の粒が細かくて白い光沢を帯びていた。風の強い日は海に入れてもらえなかった。「海浜学校」の歌に、〝大漁ぶし〟というのがあった。〝一つとやー〟というふうに始まるので、この荒波は〝ウラヂオストックの岸をうつ、そいつァゴーキだネ〟という文句があった。私がこの「学校」でおぼえた泳ぎは、しかし、犬かきにとどまったのである。

海から上ると、ゆかたにはだしで遊ぶ。乾いた鼻や咽喉（はまはす）を潮風が吹きとおる。砂丘は玫瑰（はまはす）の紅い花盛り。夕陽の中で、すでに珠の実も朱色に光っていた。もぎとって、小枝で種をほじくり、口をあてて吹くと、種が吹っとんで空洞になり笛の音がした。潮騒を貫いて木管のように鳴った。

そういえば、いつのことだったか、父が札幌から花火をたくさん買って、突然学校へ現われたことがあった―。

戦争前の平和なひと括りの夏

再び石狩を訪れた時は戦後だった。明るい黄色のワンピースを着た少女といっしょに。―晩夏の玫瑰（はまはす）の紅い花弁は枯れちぢみ、真赤に熟し切った実が、人手に触れられぬまま、砂地に種を埋めようとしていた。

砂丘の向こうに、真青な海があった。青すぎる海が。この色はすでに夏のものではなかった―。

町通りは人かげがなかった。見おぼえのあるあの家やこの家が、潮風に白く毀たれ、いくつも廃屋と化していた。割れた窓は私の顔を映すだけだった。どうしようもない廃屋だった石狩全体が。

―少女は明るかった。少女の声は明るく澄んで、あたりの空気を生き返らせた。少女の中に夏は移り住んだのらしかった。それで白い頬を上気させていた。少女が夏だった。それで私は失われた夏をとり戻すことができた。私の中で夏は死んでいたのだ。この町のように、何年もの間それに気づかずにいたことが、私にあきらかになるのがわかった。私も生き返るものを感じた。私の夏―。

月刊「さっぽろ」七月号より